

統監中の狭間茨城県知事（右上）。進撃する土浦中学生と、その後で見物する子供達（下）。（昭和14年3月卒・中38回「卒業アルバム」より）



月刊

A c a n t h u s

（土浦一高・土浦中学とその周辺のもの）

第98号

平成29年2月7日

茨城県立土浦第一高等学校

進修同窓会旧本館活用委員会

HP <http://www.sin-syu.jp/>

土浦中学の学校教練3 ～聯合大演習～

1937(昭和12)年に日中戦争が勃発すると、兵営宿泊訓練は実施されなくなり、翌1938年からは県下全中等学校・青年学校を対象に聯合大演習が行われるようになりました。今回は、1938年に筑波山麓で行われた大演習における土浦中学5年生の奮闘の様子を、『進修第42号』（1939年3月5日発行）所収の「硝煙の中で」(中38回長塚司祿)や当時の『いはらき新聞』（11月4日夕刊、5・6日朝刊）の記事をもとに再現します。

聯合大演習

1938(昭和13)年11月4日から5日に亘り、県西南7郡下の中等学校・青年学校生徒1万3千余名を動員した秋季聯合大演習が、狭間茨城県知事の統監の下、秋色の筑波山麓の野を舞台として行われました。南軍は土浦・龍ヶ崎・水海道の各中学校、取手園芸学校、石岡・江戸崎の両中学校、水海道の菁莪学館、土浦の常総学院、稲敷・新治・北相馬各郡下の青年学校の生徒総勢6000余。部隊長は水海道中学校教官島村大尉。

北軍は下妻・境の両中学、真壁・上郷・結城の各農学校、古河・下館の両商業学校、真壁・結城・猿島・筑波各郡下の青年学校生7000余名。部隊長は下館商業学校教官篠原少佐。

両軍は4日午前7時を期し、行動を開始。南軍は午前11時、新治郡藤澤村付近に集結。一方、北軍は午前10時50分、その主力を真壁郡大村付近に集中。午後2時からの、筑波郡田井村神郡(かんごおり)から杉木(すぎのき)、菅間村菅間、田水山(たみやま)村田中、作岡(さくおか)村明石(あけし)までの2里余に亘る戦線での遭遇戦を皮切りに、5日の小田村西方での払暁戦までの、若人1万3千余名による実戦さながらの大演習が繰り広げられました。

『いはらき新聞』による

4日午前8時、土浦中学5年生は高鳴る胸を押さえて、諸先生の見送りの中、校舎を後にする。進軍ラッパとともに前進すると、真鍋の人達は朝日に輝く銃剣に目を奪われ、子供達が「万歳、万歳」と叫びながら、後先になつて付いてくる。

土浦中学隊は南軍第一大隊第一中隊。集結地の藤澤に到着、早めの昼食を済ませていと敵の偵察機が上空に飛来し、

幾台ものトラックに乗った友軍が戦線に向かつていく。

10時30分、自転車部隊が声援に送られて先発。11時、いよいよ記念すべき聯合大演習開始。気分が一変、銃を執る手が汗ばんでくる。新聞記者のシャッター音を背に浴びながら斗利出(とりで)の坂を下りきった所で、時ならぬ紅一点、否、紅一点ではなく、4、5、6人……、女学校の生徒とおぼしき制服の一団が、後から後から我が部隊を追い越して行く。思わぬ珍客に、今まで緊張していた心が、しばし弛む。

正午頃小田に入り、15分休憩との命令。行軍中は気付かなかったが、ゲートル(註1)を解いて足を見ると、もう豆が踵に立派に出来ている。「俺のも出来た。」「俺のも三つ。」「等」と言う声が生々(せいせい)に起こっている。先発隊からの伝令が到着、直ちに駆け足の命令が下る。背囊が揺れる、銃が肩に躍る。小田より杉木まで駆け足、速足、駆け足、と全く死んだ方が楽だと思ふほど参つてしまふ。汗は流れ放題、氣息奄々と走っていく。

先発の自転車隊が上大島まで行かぬうちに、北条の町中で北軍と衝突、北軍は杉木に撤退。そのため北条では北軍の姿は見えず、我が部隊は北条の街の中を駆け足で通り抜ける。杉木の手前までは文字通り死んだ方が楽だと思つていたが、敵の盛んな銃声を聞いては嫌が上にも心が苛立たずにはいられない。誰の顔にも土中健児の意気が燃えている。いよいよ杉木攻略戦だ。頭上を3機の飛行機が旋回を始める。

仲田中隊長(本校武道教師)の命令一下、右側の台地に散開。満面緊張の色を漲らせて1分!2分!「距離300!撃て!」の命令に猛然小銃の火蓋は切られた。機関銃

も火を吐く。我が軍は隙を見て、敵の牙城に肉薄。敵も然る者、激しく機関銃の掃射を浴びせかけてくる。我が軍は各個躍進に移つて、前進又前進、あと100m!突撃に進め!小隊長の怒号。「突つ込め!」皆剣を揃えて敵陣に躍り込んだ。瞬く間にこの高地を奪取、一度退却した北軍の逆襲を食い止めた所で、休戦ラッパ。

ほっと一息ついたが、すでに水筒は空っぽ、水が欲しい。多くの者が、見物に來ている子供達をキヤラメルで買収して、近くの水源地からの供給を仰いでいる。私(長塚)は神郡からきた利発(りぱつ)そうな子を買収、余りの可愛さに何度もキヤラメルを上げてしまふ。

間もなく退却命令が下る。足の豆は大分発展して面積も増した。隊の者もビッコを引く者や落伍する者も出ている。見物人の中に親友の姉さんがいたので帽子を取つてお辞儀をしていると小隊長に怒鳴られる。北条の町を堂々と行進し、一路小田へ。豆の痛さにひっくり返る者も多々あるが、地元の人が所々に湯飲み場を用意し、慰めてくれる。

午後4時30分、宿営予定地の小田農業倉庫へ着く。我が隊は予備隊だったので歩哨は出さない。直ちに銃の手入れをして一休みとなる。皆思い思いの格好で休んでいる。「飯を食え!」、中隊長の命令が発せられると、すぐさま小隊長は部隊全部に命令を下す。本校卒業生心尽くしの豚汁が届き、飯盒の蓋に注いで、ふうふう吹きながら頂く。餅やキヤラメル、芋も届けられた。後片付けを済ますと、豆で膨れた足の治療、ヨードチンキ(註2)をやたらと付ける。

午後7時30分、「飯盒炊飯、用意ッ!」当番が叫ぶ。眠い体を励まして、明日の飯の洗米に掛かる。好い加減に洗って、

飯盒を当番の者に渡す。渡し終えた者は農業倉庫内に入って筵(むしろ)1枚の上に、背囊を枕にして、吠(かます)注3を被り、横になる。夜の寒さにブルブルとひっきりなしに震える。粉臭い吠を被ってうつらうつらしていたら、突然「夜襲だ！」と叫ぶ声。一同飛び起きて銃を取り、外へ出るが、整列する暇もなく、敵に包囲されてしまう。我が本隊をも含め、南軍全部が包囲され、全滅を食らってしまった。

この夜襲は審判官に無届けだったので無効とのことであったが、それにしても本隊の龍ヶ崎中学や水海道中学の歩哨は何をぼんやりしていたのか、本隊に信頼を置けなくなる。何としてもこの返礼はしやると歯ぎしりをしていると、午後8時15分頃、大隊本部より夜襲の命令が下る。今より北条町の北軍を襲撃せよとのこと。いよいよ返礼の時が来た。しかし敵は南軍の夜襲を予知している。非常な困難が予想される。

イラストのイララスト
高橋宏式(38回)
大演習(中)
進修第42号「1938年覚之書」より



歩ける者は総て整列し出発、本隊も途中で一緒になる。月光を肩から一杯に浴びて、歩哨が所々に肅然と立っている。低い声で「苦勞。」と声を掛けると、「苦勞、頼んだぞ。」との声援が返ってくる。銃声が間断なく聞こえ、機関銃の音もする。異常に緊張した空気が感じられて、大きな声を出す者もない。後から見物人

がざわざわ付いてくる。突然、敵の斥候らしき者に発見されたようで、発砲してきた。皆一斉に道路上に腹這いになる。筑波街道を行くことは不可能となり、後戻りして小田東方の山を越える。暗闇、後の人は前の人の動作をかな月明かりの下に真似るだけである。同じ格好をした黒影がずっと続いて最後は霧の中に消えている。山を下り平坦地へ。前より伝言、「間隔10歩にせよ。」「間隔10歩にせよ。」と小声で後へ伝える。後でそれを伝えているのをかすかに聞きながら、10時頃山口の部落に到着。田の中を歩いたり、泥田に飛び込んだりして、そろりそろりと平沢に入る。夜もすっかり深くなり、北条の街の灯が左後方に見える。

平沢から斥候が出され、しばらく待機、蹲ったままこくりこくりしていると、斥候が帰って来る。出発前に「敵が近いから足音に注意。」と後へ送る。北条仲町から北条小学校裏、北条新町に到着。敵陣は目前、北軍本部20mまで近づいている。

「ヤアッ！」中隊長が真っ先に突撃、全員が突入、夜襲は見事成功、万感胸に迫ってくる。無数の影がパッと飛び出したので、街の人が驚いたらしく屋外に出て見ている。これで先程の復讐が出来たと鼻高々にならざるを得ない。

帰りの行軍も静粛だった。痛む足を引き摺りながら、午前1時、小田農業倉庫へ戻り、1時30分、無性に粉臭い吠を被る。寒さに震えながら、うつらうつらしている、3時には眼が覚めてしまう。

3時30分に起床ラップが鳴る。昨夜炊いた飯盒飯を食べる。シンのある飯、強い飯(こわいめし)でとても食べたものではないが、腹に押し込む。4時、整列、人員点呼。昨日の土産品・足中の「マメ」が少しでも動くピリツと痛い。4時40分、

出発、筑波街道を北進。午前5時、小田村西突端に到着、小憩の後、小田北面の防衛に就く。甲山(かぶとやま)高地前に匍匐前進すると北軍の境中学1個中隊を発見。戦いはクライマックスとなり、彼等の銃砲声が殷々として、晩秋の筑波山麓の野に反響し、一大錦が繰り広げられる。最後に小田新田前面の乾田にて遭遇・白兵戦が演じられ、休戦ラップの音で戦闘終了。

午前7時、県知事閣下の閲兵を受けるべく君島へ向かう。12時に閲兵、分列式が終了、記念すべき聯合大演習は終わった。我々は土浦よりトラックが来て、それで帰ることになった。幾百、否幾千という参加者の注目の中で車上の人となる。この日天気晴朗、秋空は心ゆくまで澄み渡り、北方に筑波の秀峰がくっきりと浮かんでいる。



私を引合校高に
おいて波高
田街道筑波
新島街(現
の君達(昭和
西(上)徒(下)
村(上)徒(下)
田戦(下)中
小曉(下)中

『学校沿革誌』によると、土浦中学の聯合演習は、1930(昭和5)年6月20日の茨城県立下館商業学校生徒とのそれが最初

で、翌年11月には4・5年生213名が、近衛師団機動演習に参加しています。その後、1938年からは県下中等学校・青年学校の聯合大演習に5年生が参加することになりました。聯合大演習は1943(昭和18)年まで毎年続けられました。中40回の中村一夫が『進修第44号』(1941年3月1日発行)に「行軍」と題して「……肩は痛む。背囊の重さがづきづきと肩を壓迫する。頭は朦朧となつて此のまま、無意識となり、石の様に硬直して、冷い土の中にめりこむのではないかといふ妄想がちらと走る……全く中隊は音一つないタンクとなつて進軍する。前の白く見える手ぬぐひが少し遅くなつたやうに感ずると思ふと『ぐわ』と情性で、前へ行つて、前の友の背囊に衝突する。俄かに怒りがこみ上げて来て大聲で怒鳴らうとするが、その怒りも途中で消え去つて『休みか』といふ安心が起つてくる。目は自然と閉ちて立つたまま、眠つて終ふ。又黙々と歩き始める。側にもう一つの部隊が歩つてゐるやうに見える。その方へ行かうとする、白い手ぬぐひが眼から消えさつて後から『どしん』と衝突してくる。中隊は音もなく、泥濘の森、自然の偉大さ殊に夜の、暗黒の不気味さを如實に示す森の中へ再び吸ひ込まれて行つた。」と述べているように、実戦同様の過酷な演習が展開されていきました。

(高21回 松井泰寿)

注1 ゲートル
脚絆とも言う。脛の部分に巻く布・革で出来た被服。ズボンの裾を押さえることで裾が乱れないようにする。障害物等で足を怪我しないようにする。脚の鬱血を防いで血行をよくする等が目的。

注2 ヨードチンキ
沃素(ヨウ素)のアルコール溶液。沃素の殺菌作用を利用した殺菌剤・消毒剤。うがい用いるイソジンもこの一種。

注3 吠(かます)
わらわしを二つ折りにし、縁を縫い綴じた袋。穀類・塩・石炭・肥料などの貯蔵・運搬に用いた。